



中国日语教学研究会推荐

[日本]渡边淳一著 刘芳亮 费建华 注释 胡振平 审校

失乐园

上

日文版



日本现代文学
精品注释丛书

失乐园

上

日文版

〔日本〕渡边淳一著 刘芳亮 费建华 注释 胡振平 审校

译林出版社



图书在版编目(CIP)数据

失乐园／(日)渡边淳一著；刘芳亮，费建华注释．
—南京：译林出版社，2004.1
(日本现代文学精品注释丛书)
书名原文：失樂園
ISBN 7-80657-564-2

I. 失… II. ①渡… ②刘… ④费… III. 长篇小说-日本
—现代-日本 IV. I313.45

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2003) 第 031967 号

Copyright © 1997 by 渡边淳一.

Japanese reprint rights in China arranged with WATANABE Jun'ichi through
Japan UNI Agency Inc., Tokyo.

登记号 图字：10-2002-001号

书 名 失乐园
作 者 [日本]渡边淳一
注 释 刘芳亮 费建华
审 校 胡振平
责任编辑 张远帆
原文出版 講談社,1997
出版发行 译林出版社
电子信箱 yilin@yilin.com
网 址 http://www.yilin.com
地 址 南京湖南路 47 号(邮编 210009)
集团地址 江苏出版集团(南京中央路 165 号 210009)
集团网址 凤凰出版传媒网 http://www.ppm.cn
印 刷 南京通达彩印有限公司
开 本 850×1168 毫米 1/32
印 张 16.375
插 页 8
版 次 2004 年 1 月第 1 版 2004 年 1 月第 1 次印刷
书 号 ISBN 7-80657-564-2/I·431
定 价 27.50 元(上、下卷)
译林版图书若有印装错误可向承印厂调换

前言

进入新世纪后，始于上世纪八十年代的『日语热』并没有降温，随着中日两国交流的增多，更多的国人投入到学习日语了解日本的行列中来。国内也引进和编写了相当数量的日语教科书、参考书和工具书，这都是我们这些从事日语教学多年的人乐于看到的。不过，同时我们也感到，相对于品种繁多的语法指导、单词手册之类，国内的日语阅读材料是明显比较薄弱的一环。有许多学生包括身边一些自学日语的朋友发出了『无书可读』的感慨。我们一直在思考怎样的日语读本才是最实用的，于是几经酝酿，精心编注，终于可以把眼前这套书奉献给广大读者。

这套由译林出版社出版的『日本现代文学精品注释丛书』，与以往的一些泛读教材和文学选读相比，最大的特点在于其完整性。过去我们编阅读材料，常常因为篇幅的限制和教学的需要，对一些长篇的作品只能节选，对一些难度大的作品要作部分改写。这样做，对于读者来说自然有难窥全貌之憾，于编者亦有割爱之痛。现在这套丛书全部是向日本购买版权，不作任何删改的原文出版，完完全全保留了作品的原貌。据我所知，如此成规模地引进日语原著在中国加入世界版权组织后还是首次，不能不说是日语学习者的一件幸事。

1 我们把这套书定名为『日本现代文学精品注释丛书』，是为了体现在编注中的几个基本出发点。首先，选取的都是『现代』作品，这些作品可以体现现代日语的面貌，提供给读者鲜活的语言。入选的作家也是以语言规范平实见长，是学习者容易模仿并值得模仿的对象。同时，所选作品均在日本现当代文

学史中有一定的地位，在国内也已经有了不小的知名度，是公认的非常好读的『文学精品』。题材虽不尽相同，但无论是散文游记、爱情小说还是悬疑小说，都能引人入胜。当然，这套书毕竟不同于一般的文学作品欣赏，主要是献给日语学习者的读物，它的实用性更多体现在『注释』上，每本书中对需要注意的生僻单词、语法现象和文化常识都做了较为精当的注释。对于日语程度较低的读者，可以扫除他们阅读中的障碍；对于有一定基础的读者，恐怕也有助于日语知识的巩固与提高。除了方便自学之外，这套书可以供老师们选取一些篇章作为泛读课的教材；考虑到入选作品多有中文译本，在教授翻译课程的时候也可作为参考书使用。

这套丛书是一个新的尝试，我们动了不少脑筋，花了不少力气，也一定会存在不少问题。希望大家能欢迎这个尝试，仔细读这些书，提出批评意见，帮助我们把这套书出好，并且继续出下去。

中国日语教学研究会会长

胡振平

二〇〇三年六月

上

部

落^{らく}

日^じ

「怖いわ……」

その一言が凜子の唇から洩れたとき、久木は思わず動きを止めて、女の顔を盗み見た。いま、凜子はたしかに久木の腕の中にいる。小柄だが均整のとれた軀はふたつに折り畳まれ、その上を男の広い背がおおっている。

ベッドのわきの淡い明りをとおして盗み見た凜子の顔は、眉の内側に縦皺が寄り、閉じられた臉は小刻みに震え、泣いているようである。

まさしくいま、凜子は快楽の頂きにのぼり詰め、果てる寸前であった。女の心と軀をとり巻くすべての拘束から解き放たれ、愉悅を貪りながら満ちていく。

その直前に「怖い……」とはどういうことなのか。

これまで久木は何度か凜子と結ばれ、その度にさまざまな言葉で、悦びを訴えるのをきいていた。あるときは「だめ……」といい、「ゆくわ」とつぶやき、「助けて……」と訴えたこともある。そのときどきにいいかたは違っても、凜子の軀が悦びの頂点で爆ぜるようにゆき果てることに変りはない。

だが「怖い……」、といったのは、今度が初めてである。

① 思わず/不由得、禁不住。 ② 均整のとれた/匀称。(慣用句) ③ 寸前/臨近、眼看要。 ④ ゆき果てる/达到高潮。 ⑤ 変りはない/没什么不同。

「なぜ？」ときき返したい気持ちを抑えて、久木はさらに強く抱き締め、どう悶えても逃れきれぬ密着感のなかで、凜子は小さな痙攣を重ねながら行き果てた。

久木が改めてきいたのは、それから数分経ってからだった。

結ばれる前、人妻の慎ましやかさを保っていた凜子は、いまは少し前の乱れを恥じるように、軽くくの字に背を曲げ、胸元から腰のあたりまでを掻きあげたシートでおおっている。その円い肩口に頸を寄せてうしろから囁く。

「いま、怖いといった……」

吐く息が耳許に触れたのか、凜子は一瞬びくりと身を震わせたが返事はない。

「怖いって、どういうこと？」

久木がもう一度きくと、凜子は満ちたあとの少し気怠げな声でつぶやく。

「なにか、軀中の血が逆流して外に噴き出してゆくような……」

男の久木には想像できない感覚である。

「でも、いいのだろう」

「もちろんそうだけど、それだけではなくて……」

「教えて欲しいな」

久木がさらに尋ねると、凜子は思い返すように間をおいて、

「あの、夢中でのぼり詰めていくときは、皮膚という皮膚がぞくぞくと栗立つ感じがして、子宮が太陽のように熱く大きくなって、そこから全身に快感が溢れ出して……」

きいているうちに、そんな多彩な変化を巻き起こす女の軀が不思議で妖しく、さらには妬ましく思えてくる。

「ここが……」

① くの字に背を曲げ/身子弯成弓形。 ② 気怠げな聲/有气无力的声音。(げ接在形容词词干后表示某种神态、样子。) ③ 男の久木には想像できない/身为男人的久木所不能想像的。(には表示主语。) ④ 間をおいて/空出时间,停顿一会儿。(惯用句) ⑤ 皮膚という皮膚/全身的皮肤。(把两个同一名词用という连接起来,表示凡是此类事物无一例外,皆如此。)

つぶやきながら、繁みの上の、子宮^①があると思われる個所に軽く手を添えると、凜子は目を閉じたまま、

「そこまで、あなたは届いていないはずなのに、深く強く刺さりこんで、なにか脳天まで貫かれたような、もうこのままなにをされてもいいような気がして……」
 そこまでいうと、凜子は突然しがみつき、久木はその、火照り^②を残した軀をさらに抱き締めながら、凜子の感覚が今日でまた一段と深まったことを実感する。

結ばれたあとはいつも、どちらからともなく寄り添って眠る。このところ二人の形で多いのは、女が軽く横向きになって、仰向けの男の左の胸元に頭をのせ、下半身はさらに寄り添い、両肢を交互にからませる。

いまま二人はその形で横たわっているが、やがて男の右手がゆっくりと女の肩まで延びて背を擦^③ってやる。一瞬前の奔放さは忘れたように凜子は静まり返り、仔犬のような従順さで目を閉じたまま、頃から背にいたる愛撫を受けている。

凜子の肌はすべすべとして柔らかい。それを久木が賞^④でると、凜子が小声でつぶやく。
 「あなたと、こんなことになってからよ」

満ち足りた愛の行為が、女性の体内の血の流れを良くし、ホルモンの分泌を促^⑤し、肌を潤わせるのであるうか。あなたのせいだといわれて、久木は満足しながらさらに愛撫をくり返すが、次第に疲れを覚えて指の動きが鈍くなり、凜子も満ちたあとの充足と安堵感^⑥のなかで、徐徐に目を閉じる。

むろん眠るときは、二人にとって最も心地よい形で休むが、目覚めると凜子の頭が久木の肩口をおし続けて、腕が痺^⑦れていたこともある。またときには上体が離れ離れになり、下半身だ

① 子宮があると思われる個所/感覚有子宮的地方。(と思われる是由思う接自発助動詞れる而成,表示委婉的断定。) ② どちらからともなく/不知从哪儿。(～ともなく是惯用型,表示无意地、不知不觉地。) ③ 奔放さ/奔放。(さは接尾词,接在形容词、形容动词的词干后构成名词。) ④ すべすべとして/光滑状。

け絡み合っていたこともある。いままこのまま眠れば、二人の形がどのようなになるか予測はつかない。

だがいづれにせよ、情事のあとの肌と肌が触れるでもなく離れるでもなく、ほどよく寄り添ってベッドの上で漂う、そんなとりとめもなく、少し乱れて怠惰な感覚に男も女も馴れ親しんでいる。

そんな状態のまま、久木の頭はまだ醒めていて、カーテンで閉じられた窓のほうへそつと目を向ける。

多分、そろそろ六時で、緩やかに弧を描く海岸線の彼方に陽の沈む頃である。

二人が鎌倉のこのホテルにきたのは、昨日の夕方であった。

金曜日で、久木は九段にある会社を三時過ぎに出て東京駅で凧子と待ち合わせ、それから横須賀線に乗って鎌倉で降りた。

ホテルは七里が浜ぞいの小高い丘にあるが、夏のあいだ若者で賑わった海岸通りも、九月に入ったせいか車も減り、タクシーで二十分もかからずに着いた。

久木が凧子との逢瀬にこのホテルを選んだのは、東京から一時間ほどの行程で都会から離れて、小旅行をした気分になれるからである。くわえて部屋からは海が見えるうえに、鎌倉という古都の静けさも堪能できる。さらにいえば、ホテルはまだ新しいだけに馴染みの客も少なく、あまり他人の目に触れることもなさそうである。

もつとも久木がそう思ったところで、二人でいるところを誰かに見られないとはかぎらない。久木が勤めている現代書房は出版社だけに、男女のことには比較的理解があるとはいえず、妻以外の女性とホテルに来ていることが知れては、やはりマイナスである。

① いづれにせよ/反正, 不管怎样。(惯用句) ② 触れるでもなく離れるでもなく/若即若离。 ③ 逢瀬/见面的机会, 特指男女幽会的机会。 ④ ~とはかぎらない/不一定, 未必。(惯用型) ⑤ とはいえ/虽说。(惯用型)

できることならその種のトラブルは極力避け、他人にうしろ指をさされぬよう、身を処するにこしたことはない。実際、久木はこれまでそのように気を付け、女性とのことには細心の注意を払ってきた。

だが最近、とくに凜子を知ってから、久木は必要以上に人目を避け、余計な気遣いをする気が失せてきた。

そのきっかけになったのは、やはり凜子という、最も好ましい女性とめぐり会えたからで、この人と逢うためなら、多少の危険は仕方がないと思うようになってきたからである。そしてさらに、その開き直りのきっかけになったのは、一年前、それまでの部長職を解かれて、調査室という閑職に廻されたからである。

たしかに久木にとって、いまから一年前の人事異動の衝撃は大きかった。正直いってそれまでは、久木も人並みに会社の中核にいてステップアップすることを考えていた。事実、一年前の五十三歳のころには次期の役員候補と周囲からいわれ、自分でもそんな気持になっていた。

それが突然、昇進するどころか、出版部長を解かれ、誰が見ても閑職とわかる調査室に廻された。その裏には、二年前に社長が交代したことや、社内には社長側近ともいふべき、新しい勢力が抬頭していたことへの認識の甘さなどもあったが、すでに異動が決まってから、原因をとかやくいっても仕方がない。

それより久木にわかったことは、ここで役員になるチャンスを選した以上、二年後には五十五歳になり、もはや永遠に役員になることはありえない。たとえ動くことがあったとしても、さらに地味なポジションに移るか、子会社に出向するだけである。

そう思った瞬間から、久木に新しく見えてくるものがあつた。^⑥これからはあまりあくせくせず、もっと自由に生きていこう。どう藻掻いたところで、一生^⑦

① うしろ指をさされぬよう/为避免被他人背后指责。(うしろ指をさす意为背后指责,惯用句。) ② ~にこしたことはない/莫过于,没有比……再好的了。(惯用句) ③ 必要以上に/过分地。 ④ ステップアップ(step-up)/逐步上升。 ⑤ 出向するだけである/只有调去子公司了。 ⑥ どう藻掻いたところで/再怎么挣扎。(~たところでは惯用句,意为不管怎样……。) ⑦ 一生は一生だ/这辈子就这样了。

は一生だ。ひとつ視点を変えると、それまで大切であったものがさほど大切でなく、逆に、それまでさほど貴重と思わなかったものが、急に貴重に思えてきた。

部長職を解かれたあと、肩書こそ「編集委員」となっているが、実際には仕事らしい仕事はほとんどない。調査室勤務だから、各種の資料を集め、ときにそこから特集のようなものを組んで、^②しかるべき雑誌に提供する。それが主な仕事ではあったが、それもいつまでに、といった明確な期限があるわけでもない。

自由だが暇なポストに身をおいて、久木ははじめて、これまで自分が本当に心の底から人を恋し、愛したことがなかったことに気がついた。

むろん、これまでも妻をはじめ、他の女性に好意を抱き、^③秘かに浮気をしたこともあったが、常に中途半端で燃えきったという実感がない。

このままでは、人生で大事なことをやり残したことになる。

松原凜子^{りんこ}が久木の前に現れたのは、まさしくそんなときだった。

恋の出会いはいいつも偶然であるように、久木が凜子に逢ったのも、まさしく偶然の機会からだった。

調査室に廻って三ヵ月経った去年の末、新聞社のカルチャーセンターに勤めている衣川^{きしかわ}という友人から、講演をしてくれないかという依頼があった。内容は「文章の書き方」という講座で、三十人近い受講生がいるが、そこで文章について話をして欲しいということだった。

久木はとくに実作者でもなく、ただ出版社にいて本をつくってきただけなので、そんな話はないと断わったが、衣川は、あまり大袈裟に考えず、これまでいろいろな人の文章を読んて本にしてきた経験を語ってくれるだけでいいという。さらに、衣川に「いま、暇なのだろう」といわれて久木は氣持^{きもち}が動いた。

① 仕事らしい仕事/像样的的工作。(らしいは接尾词, 接体言下表示应有……的样子, 像……似的。) ② しかるべき/适当的, 应有的。(连语) ③ して欲しい/想要。(惯用型) ④ 氣持が動いた/动心了。

衣川が声をかけてくれたのは、ただ講演を依頼したためでなく、閑職に廻された久木を、少し勇気づけてやりたいという気持ちからのようである。

もともと衣川とは大学時代に同期で、ともに文学部を卒業してから衣川は新聞社、久木は出版社と勤め先は別れたが、ときどき会って酒をくみ交すあいだがらだった。六年前、久木が出版部長になったのを追いかけるように、衣川も文化部長になったが、三年前、突如、都内のカルチャーセンターに出向することになった。その異動が衣川にとって好ましいことなのか否か、よくわからなかったが、「俺もいよいよ出るよ」といつていたところをみると、やはりまだ本社のほうに未練があったのかもしれない。いづれにせよ、ラインを外れたという意味では衣川のほうが先輩で、それだけに久木のことを気遣って、声をかけてくれたようである。

そう気付いて、久木は素直に彼の依頼を受け入れ、決められた日の夜にカルチャーセンターに出かけて行った。そこで一時間半ほど講演をしたあと衣川と食事をしたが、そこに一人、女性が同席した。衣川は同じセンターで、書道の講師をしている人だと紹介してくれたが、それがまさしく凧子であった。

あのときもし衣川の誘いに応じなかったら、そして彼が凧子を食事に連れてこなかったら、二人の出会いも、いまのただならぬ関係も生まれなかったことになる。

凧子との出会いを思うとき、久木はきまって恋の不思議さというか、宿命的なものを感じてしまう。

衣川に紹介されて凧子と会った瞬間から、久木はあるときめきに似た心の高ぶりを覚えた。正直いって、久木はこれまでも、妻以外の女性と関わりがなかったわけではない。若いときはもちろん、中年になってからも際々合っていた女性はいた。そのなかの一人は、久木のヌーボーとしたところがいいといったし、もう一人は、年齢に似合わぬ少年っぽさに惹かれた、と

① と/相当子というふうに。 ② あいだがら/来往关系，交際。 ③ ~か否か~/是否……。 (惯用型，表示从几个中选择其一。) ④ それだけに/正因为如此。(だけに 是惯用型，意为正因为。) ⑤ ただならぬ/不一般的。(连体词) ⑥ 少年っぽい/少年气质的。(っぽい 是接尾词，表示富于某种倾向。)

いってくれた。久木は自分が別に茫洋^{ぼうよう}としているとも、少年っぽいと思ったこともない。それだけに妙な褒められかただと思ったが、あとで自分の女性への接し方には、そんなところがあるような気もしてきた。

それにしても、凜子との近付きかたは、少年っぽいというのか、自分でも戸惑うほどの一途さであった。

まず衣川の紹介で一度会っただけなのに、その一週間後には、貰った名刺を頼りに自分のほうから電話をかけていた。

これまでも、女性に関心がなかったわけではないが、これほど積極的に出たのは初めてである。久木は自分で自分に呆きれながら、走り出した思いは止まらない。

それから毎日のように電話をして逢瀬を重ね、二人がたしかに結ばれたのは今年の春だった。

初めの予感どおり、凜子は魅力的な女性であったが、久木はそのあと改めて、彼女のどこに惹かれたのか考えてみた。

顔はことさらに美人というわけではないが、細っそりとして愛くるしく、やや小柄で均整のとれた軀を、人妻らしいシックで落着いたスーツでつつんでいる。年齢は三十七歳で、歳より若く見えたが、それよりも久木が惹かれたのは、凜子が書道のたしなみがあり、なかでも楷書^{かいし}が得意で、短期間だがそれだけを教えるにきていたことである。

初めて逢ったときから、凜子はまさしく楷書^{かいし}のような折目^{おりめ}の正しさと、気品を備えていた。そんな凜子が徐々に優しさや親しさを見せながら、ある日、軀を許し、そのあと着実に崩れ、乱れていく。

その崩壊の過程が、男の久木にはたまらなく愛しく、艶^{えん}である。

① ~を頼りに/依靠。(慣用句) ② わけではない/并不是,后文的というわけではない意同。(慣用型) ③ 折目の正しさ/規矩。(折目の正しさ是慣用句。)

情事の後の二人は肌と肌とが触れているだけに、互いの動きが即座に相手に伝わる。^①

いまでも、久木がカーテンのかかっている窓の方へ首を向けた途端、凜子の左手が怯えたように胸元にしがみついた。久木がその手を軽く抑えてサイドテーブルの時計を見ると、六時十分だった。

「そろそろ、陽が沈むかもしれない」

部屋の床まで広がった窓からは七里が浜の海と江の島が見え、その先に夕陽が落ちていくはずである。昨日、二人が着いたときは、まさに陽の落ちる寸前で、江の島へ渡る大橋のたもと丘陵に、赤く燃えた太陽が沈みかけていた。

「見て、みようか」

凜子にいいながら、久木はベッドから身を起こし、床に落ちていたガウンを着てカーテンを開ける。

瞬間、目の眩むほどの斜光が部屋のなかに流れこみ、床からベッドの端までを照らしだす。

「間にあつた……」

夕陽はいま、江の島と対する丘の上にあり、大空の下半分を朱に染めながら、ゆっくりと落ちていく。

「きてごらん」

「ここからでも、見えるわ」

裸のままの凜子は突然の明るさに戸惑ったのか、シートで全身をおおったまま、軀だけを窓のほうへ向ける。

「昨日より、赤くて大きい」

① だけに/正因为。(慣用型,表原因。) ② カーテン (curtain) のかかっている/悬挂着窗帘。(かかる意为悬挂。) ③ 途端/正当……的时候。 ④ 裸のまま/赤裸着。(まま表示一如原样、仍旧。)

カーテンを一杯に開くと、久木はベッドに戻り、凜子と並んで横たわる。

夏が終わったばかりのいまは、まだ熱気をはらんだ霧が宙に漂い、落日はその霧をとりこんで膨らんで見えるが、下円の一部が丘にさしかかった途端、急速に萎み、血のかたまりのような真紅の玉に変貌する。

「こんな夕陽を見るのは、初めてだわ」

久木はそれをききながら、いまだし前、凜子が、子宮が太陽のようになった、という言葉を出す。

いま、夕空に消えていく落日のように、凜子の燃えた軀も鎮まりつつあるのだろうか。

真紅の光芒を残して夕陽が丘の彼方に消えると、待ちかまえていたように空は紫色に変わり、宵闇があたりをおおう。一度陽が沈むと、夜の訪れは急に早まり、それまで黄金色に輝いていた海はたちまち墨色に塗りこまれ、彼方の江の島の輪廓が海ぎわの明りとともに浮き出してくる。

昨夜、久木はこのホテルに来て初めて、江の島に灯台があることを知ったが、そこから放たれる細い光の帯が、わずかに夕焼けの残る空を走り抜ける。

「暮れてしまったわ」

凜子がつぶやくのに久木はうなずきながら、一瞬、凜子が、家のことを思い出したような気がして息をひそめる。

衣川からきいたところでは、凜子の夫は東京の大学の医学部の教授らしい。年齢は凜子より十歳近く上だときいたから、四十七、八になるのだらうか。

「真面目なだけ取り柄よ」と、凜子が一度だけ冗談まじりにいったことがあるが、久木が知人を通してきいたところでは、長身でなかなかのハンサムらしい。

① つつある/正在。(つつ是接续助词,后接动词ある,表示动作正在进行,是书面语。) ② 息をひそめる/屏息。(惯用句) ③ ところでは/根据,就……范围。(惯用型,常与という,らしい,ようだ等呼应。) ④ 冗談まじりに/半开玩笑地。(まじりは接尾词,意为混合、掺杂。)